談話の偏重について

東京保育學校長　内山憲尚

一

新らしい米國の雜誌に「漫畫は心理學的に見て兒童の學習上適當なものでない」と云う教育心理學者の發表があつた。

繪畫に對しては專門でないからはたして兒童に害になるかどうかと云うことは論ずる資格はないが、これの理由は、あまりにも漫畫が刺戟が强すぎるから、落ちついた子供の向學心をなくすると云うことである。

私は今日の紙芝居について同じ樣なことが言えるのではないかと考えるのである。

このことについては以前から少しは考えていたのであるが、最近多くの幼稚園託兒所保育園を廻つて見てこの感を深くした。

幼兒の場合、あまり紙芝居ばかりを與えると云うことによつて、童話や、朗讀や話し合いを靜かにする態度は減少して來るのではないかと思われる現象を示している。

二

幼兒たちは視覺に訴える紙芝居に對して興味を持つて「先生、紙芝居をしてよう」と紙芝居を要求する。

保姆さんは、讀んでやりさえすれば事足りる紙芝居の方が手數がかゝらず、すぐに出來るので、幼兒が要求するがまゝに紙芝居を與える、かくして談話と云えば紙芝居のみが與えられる傾向になつて來る、その結果、幼兒たちは、刺戟の强い紙芝居によつて馴らされて、靜かな童話や朗讀では、あまりに刺戟がなさすぎるので、「面白くない」と云う聲になつて現われることとなるのである。

紙芝居は保育に害になると云うのではない、たゞあまりにも紙芝居のみが與えられて、紙芝居中毒を起している狀態にあることから救わねばならないと考えるのである。例えば酒の好きな人が、度をすごして永年のみ續けたためにアルコール中毒となつて、アルコール氣がある間は元氣だが、アルコール氣が切れると不氣嫌になるのと同じである。酒も少量で

あれば血の廻りをよくして藥ともなるが、中毒になつて仕舞つては身の毒である、

三

元來談話が童話のみに偏重していることについて三十年來聲を高くして叫んで來たのであるが、最近は紙芝居偏重の傾向である。

談話は次の樣に分類しているが、今その分量について示して見れば、

- 談話
  - 話し方
    - 自由發表
      - 生活發表
      - 思想發表
    - 童話
      - 既成童話
      - 創作童話
    - 2
  - 聽き方
    - 童話
      - 童話朗讀
      - 繪噺紙芝居
      - 人形劇
      - 2〜3
      - 3〜4
    - 自由談話
      - 庶物談
      - 行事談
      - 時事談
      - 謎・一口噺
      - 言語遊戯
      - 1
      - 1

即ち幼兒の話しが談話の十分の二、童話、朗讀が十分の三か四、繪噺紙芝居、人形劇が十分の一か十分の三、保姆さんが中心となつての自由談話が十分の二位の量である、勿論、同數ではなく時間の割合であるから、謎や一口噺、言語遊戯は五分六分位づゝであるから同數から言えば多くなるかも知れない。

四

今度の新しい教育法の第七章幼稚園の第七十八條第四項にも言語の使い方を正しく導き童話繪本に對する興味を養うこと

と明記してある。アメリカあたりの幼稚園を參觀すると保姆さんが椅子にかけてその周圍に子供たちが集つて話を靜かに聞いているなごやかな風景をよく見受けるが日本の保姆さんたちはどうも話しをすると云うことをなんだか大變に保育と離れたもの　樣に考えている樣である。そんな考を持つていないまでも、人の前で話をすると云うことを恥かしがる傾向がある。

これは今日までの日本の家庭での教育や學校の教育が人の前に出て、素直に意志發表をすることの練習をしていないことに基因しているのであるが、この惡い教育は一日も早く是正して、自然に、純眞に明朗に人の前で話の出來る習慣をつける必要があると同時に、幼兒に對して「話し方」を通じてこの習慣をつけてやらなければならない。

五

童話は決して難かしいものでもなければ特別な技巧を要するものでもない、ありのまゝの生活――日常の話をそのまゝに延長したものである。

先日ある幼稚園へ行つたが、童話をすると云うのでテーブルが出ている、テーブルにはテーブル掛けが掛けてあり花まで置いてある。更におどろいたことには話を始めると、小使の小母さんがお盆に水差しとコツプを置いてテーブルの上へ持つて來るのである。童話と政治演說と間違えているのではなかろうかと思つた。今日まだ童話に對してこんな認識不足なことを見せられるのである。

童話は生活なり

決して特別な、他から講師をたのんで來てやらねばならないものではない。

安易で顏をかくしてやる紙芝居のみを與えて、徒らに强い刺戟のみを幼兒に押しつけてはならない。

六

この閒荻窪のある幼稚園の母の會へ行つた時、お母さんから

「先生、私の家の子供は幼稚園へ上る樣になりましてから、幼稚園紙芝居を見せていたゞきましてそれからと云うものは街頭の紙芝居に興味を感じまして、拍子木の音を聞くと飛び出して行つてこまつていますがどうしたものでしよう」

との質問を受けたが、これなども、幼兒教育者として、園長保姆の一應自省して見る可きことであると思う。

幼兒が街頭紙芝居に興味を持つ樣になつたら、こまつたものである。あの刺戟の强い色彩、度の强い說明から與えられるものは、柔らかで潤いのある我々の理想の保育からは可成りかけ離れたものである。

七

要するに紙芝居をやつてはいけないと云うのではない、その分量を減らして與えると共に、幼兒の生活面を生かしてあらゆる機會に話をしてやること、靜かな美しい童話を聞かせてやると云うことを忘れてはならない。

○

『お自慢の南瓜、大きくなつて』
『太郎ちやんの頭位』
『へえ』
『花子ちやん　頭位のも』
『そおう。なんでも幼兒が標準ね』
『でも、わたしには、そう見えるんですもの』
『いくつ出來て』
『組の子の數とおんなじ』
『まあ。ほんとうに！　？』